

紹介

近代沖繩の歴史と民衆
中世における個人と社会

沖繩歴史研究 別冊

近代沖繩の歴史と民衆

本書は、沖繩歴史研究会に集う研究者が、週一回、満一年にわたる共同研究と討議のすえに、各人それぞれの問題関心にしたがつてまとめあげた、九篇からなる論文集である。沖繩のいわゆる本土返還を前に「沖繩もの」は、現在出版界の一つのブームをなしているが、沖繩歴史研究会「近代史特集」班の共同研究は、「こうした『ブーム』とは無縁のところ、否、より正確には、このようにな『ブーム』に抗して」、「沖繩における歴史研究を科学的な基礎の上で、みのある研究と批判がなされる状況をつくる」ことを目的として発足した。そして「第一に、近代以後の沖繩の歴史過程を、

沖繩じたいで自己完結的に展開したものと
してではなく、あくまで日本史の一環とし
て位置づけて行くこと」「第二に歴史を基
層においてうごかすものは誰であるかを、
事実にもとづいて明らかにすること」を共
通の視点としたとされる。本書は、こうし
た共通の問題意識のもとにまとめられた、
在沖繩の研究者による、近代沖繩史に関す
る殊玉の論文集である。

沖繩の歴史に関する研究はむろん古い歴史をもっているし、すぐれた成果をあげてきている。しかし王朝交替史が、なお市民権をもっているのが現状であり、経済や社会や庶民生活や文化の、個々のすぐれた業績はあげられていても、民衆の立場にたった沖繩史の再構成は、じゅうぶんとはいえない。一方日本の歴史にとっても、沖繩の歴史の歩みを日本史の一環としてとらえてきたかどうか。沖繩の歴史に、本土には遺存しない珍らしい史料を求めるとは盛んであるが、沖繩の歴史が、ほかならぬ日本史の重要な一環であることを、はたしてじゅうぶんに顧慮してきたかどうか。

「沖繩史」を正しくとらえて行くことは、『沖繩史』をたんに『日本史』の中に位置

づけるという以上に、『沖繩史』を通して『日本史』への重要な提言がなされるものと、私たちは考えている。「沖繩の正しい『近代史』像を構築して行くことは、いま歴史研究者に課された緊急な課題だと考える」という抱負と提言は、戦後四分一世紀の異民族支配に抗し、その前四分三世紀の日本資本主義の収奪の実態を研究しつつある研究者の言葉をして、そのすぐれた個々の研究成果とともに、千鈞の重みをもって私どもにせまってくるのである。(以上、引用は何れも本書、附録、「近代史研究の意義と課題」から) 現在、本土と沖繩の研究の交流は、必ずしもじゅうぶんではない。人為的に隔てられている以上に、本土の研究に沖繩への学問的関心が不足しているといわなければならない。この提案を謙虚にうけとめ、沖繩の研究者と密接に交流しながら日本史の一環として沖繩像を再構築してゆくことが、われわれに課された緊急な課題であろう。

収載論文の目録は以下の通りである。

近世期の沖繩

——薩藩封建体制下の沖繩農村——

上原 兼善

「琉球処分」と農村問題

金城 正篤

宮古農民の人头税廃止運動 島尻勝太郎
「土地整理」に関する一考察

西原 文雄
明治期の沖繩の糖業 金城 功
移民と出稼ぎ 安仁屋政昭

その背景——
大正・昭和期の労働運動 田港 朝昭
——その発掘と考察——

沖繩近代史における本島と先島
——「差別」の構造と克服主体の形
成—— 西里 喜行
仲地 哲夫

伊波普猷論覚書
付録 近代史研究の意義と課題
——各テーマを通して—— 共同執筆

(A5版 二八〇頁 昭和四五年五月 那覇
市寄宮 中央図書館内 沖繩歴史研究会刊
頒価九〇〇円) (熱田 公)

W・アルマン著
鈴木章訳

中世における個人と社会

著者はケンブリッジ大学の中世史担当教授で、本書はアメリカ、ジョンズ・ホプキンス大学での三回に亘る講演をもとにして書かれたものである。訳者は社会経済史研究の成果をふまえて中世イギリス国制史の研究に野心を燃やしておられる方で、本書は丁度うってつけの訳者を得た。

一見奇妙な演題がつけられているが、第一講では、中世初期においては、キリスト教とか神とかに根ざす王権から発した上からの秩序づけという政治理念が支配的であったとされ、そこから、ヨーロッパ中世の封建的ヒエラルヒー、それへの個人の埋没が説かれている。

しかし本書の圧巻は第二講にある。すなわち、封建制度のなかに、実は、強い個人的な絆によって動かされているものがあったこと、また、契約と同意との尊重という理念に基づくものがあつたことが指摘され、

その歴史的発現をマグナ・カルタに求め、封建的ヒエラルヒーに呻吟していた臣民の国政参加、市民化の意義が、ドイツ・ファシズムの重圧を体験した教授自らの姿の如く、熱気をはらんで強調されている。こうしてマグナ・カルタを出発点とするイギリス・コモローの力強い発展が始まるが、これがイギリスの各階層の平等化をもたらすし、色々な手直しを経て、同質の、しかも統一ある王国共同体社会を生み出すこととなると説かれる。教授によれば、これこそが、イギリスをして大陸諸国に先んじて近代化のトップを切らした所以であり、またその栄光は、中世千年間のイギリスにおける法尊重の貴重な伝統の上に立ってはいじめてから得られたものであつたと示唆されている。

第三講ではいわゆるルネサンスが説かれるが、それも、中世思想家の中にみられる個人の尊重、人間の自由の尊重が思想史的に解説され、封建制度が近代化への重要な橋渡しをしていることが強調されている。

ともすれば、中世は、近代に反するもの、近代がのりこえてゆくべきものとして考えられがちであり、その否定面のみが強調さ